

大学における多読授業の実践とその効果

The Practice and Effect of an Extensive Reading Program at University

池田真寸子・紅子メースン

Masuko IKEDA・Beniko MASON

中部地区英語教育学会 紀要 第24号 別刷

Reprinted from Bulletin of The Chubu English
Language Education Society. No 24 (1994)

大学における多読授業の実践とその効果

キーワード：教授法、授業形態、個別化

也田真寸子・メイソン紅子

1. はじめに

大学の講読クラスは、学生数40人以上が一般的であろう。このような多人数のクラスで、学生のほぼ全員の興味を引くテキストを見つけることは不可能だろうし、いわゆる訳読式の授業形態では、指名された学生以外の者に学習活動をさせることは非常に難しい。これに対し、授業時間中、終始出席者全員が四技能の内のいずれかの学習活動をし、学生個人の能力に応じた指導がなされ、学習者が興味を持つ教材を、自己のペースに合わせて進めていくことによって、英語力を養うという方法が、本稿で論じる多読授業である。ここでは授業の実際の進め方と、精読クラスとの比較、多読授業を成功させるための留意点について論じる。

2. 多読授業

a. オリエンテーション

英語の読解力を養うには、自分の好きな洋書を、なるべく辞書を使わないで多数読むことだと教師からアドバイスを受けた人は大勢いるだろうし、その通りに実行して力をつけた人もいるだろう。しかし大多数の人は、読解力を身に付けたいと思っても、外からの何らかの強制力が働かない限り、自ら洋書を読もうとはしないであろう。多読授業では課外活動として読ませることはもちろん、授業中に何をどのように読むのかを指導し、授業時間の一部を読書に充て、読書の習慣を形成させる。殆どの学生にとってこのような授業形態は初めてだろうし、従来の教師主導の授業を期待していた者は、この教授法に戸惑いをおぼえ、こんな方法で果たして力がつくのだろうかと懐疑的になるかもしれない。このような心理状態で授業を受けても望ましい効果は得られないので、教師は学期初めはもちろん、それ以後も繰り返し多読の効用と授業の必要性を学生が納得できるように説明しなければならない。

学生は英語を辞書を引かずに読むことなどできない、と思っているので、最初の授業では、全員に500語レベル程度のリーダーを一斉に黙読させてみる。大部分の学生にとって、20ページ余りのまとまった内容の英語を、意味を理解するだけで、訳文を要求されないというのは初めての経験で、自分が最後まで読めるのかどうか半信半疑である。しかしどの学生も、時間はかかるけれど最後まで読み通して粗筋を理解することができるので、その体験に驚き感動する。また、教師から学生へという上から下への説明よりも、既に多読授業を受講した先輩に教室へ来て体験談を話してもらったり、体験談を集めたものを学生に読ませたりすることも学習意欲を高める効果がある。

b. 教材

教材は Heinemann, Longman, Oxford, Collins, Macmillan 等から出版されている *graded readers* で、500語程度のレベルから始める。Graded readers であっても日本語の対訳や注釈があるものは使用しない。課題は前期後期とも各々1,000ページ、年間2,000ページを読むこととする。500～600語レベルの本のページ数は約20ページで、学生は30～60分で読了できるし、冊数が増えるに従って読む速度も増してくる。1,100～1,600語レベルの本は35～40ページ程で遅い学生でも2時間もあれば読み終わられる。従って、新学期当初から計画的に読んでいけば、年間2,000ページというのは余裕をもって消化できる量である。課題を真面目にこなせば、大部分の学生は、一年間で1,600～2,200語レベルの本が読めるようになる。

各学生に年間2,000ページを読ませるだけの本をどのように準備するかについては、色々方法があるだろうが、大学の予算で賄えない場合は、筆者は必要冊数を受講生の人数で割って、年度初めに学生に購入させ、それを一旦教師が集めて保管し、学生に貸し出す形を取って、一年間の授業を終えた後、学生に本を返すようにした。

c. 多読ノート

学生は多読用のノートを作り、本を一冊読み終える毎にそのノートの上方に (1) 読了した日の日付、(2) 本の題、(3) 作者名、(4) 出版社名、(5) 本のレベル、(6) 読書に要した時間、(7) 本のページ数、を記入する。それに続けて本の粗筋を英語でノートの上半分に書く。下半分には日本語で、本についての感想と本を読んだ時に気づいた自分の英語読解力について感想を書き、授業に持参する。教師はこのノートをチェックして、個々の学生の学習状況や、どのような問題に直面しているのかを知り、欄外に励ましの言葉や、次にどんな本を読めばよいか等を書いて、常に学習意欲を起こさせるようにする。

d. 学習活動

授業では、全員がペアになり、自分が前の週に読んだ本の中で相手に推薦したい本の粗筋を英語で話す。この時ノートに書いた粗筋を棒読みするのではなく、ノートを見ないで相手の目を見て話し、聞き手も確認や質問をするなどして、一方通行ではなく、二方向の活発な会話を行なう。この活動は教師に指名された特定のペアがクラスの前で発表するのではなく、全ペアが各々一斉に行なうので、教室は音の渦になる。この間教師は学生の会話を聞いて回るが、特に目立つ間違いでない限り、殆ど誤りを訂正せず、それよりもむしろ間違いを気にせずにとんどん話すように促す。この時日本語を話している学生は厳しく注意する。役割を交替してペアのどちらもが粗筋を話し終えたら、学生は自分が聞いた話をノートに記録する。これは後日自分が同じ本を読む場合に、*background knowledge* となって本の理解に役立つ。残りの時間は個々の学生の読書に充てる。授業中は教師が学生全員に対して話をする時以外は室内にクラシック音楽を流す。これはペアが英語で話すとき、他の学生に自分達の英語が聞かれるのを意識して話しにくくなることのないよう、また教師が学生の間を回って個人的に学生を指導する時の内容が他の者に関こえたりしないように、音の壁を作る役目をする。更に、学

生の緊張をほぐして学習し易い環境を整える効果もある。

e. 教師の役割

教師は学期初めに多読授業について説明をする時以外は、あまり長々と学生全員に対して話をしない。もちろん学期途中でも、クラスの大多数の学習態度に問題があったり、授業の主旨が十分に理解されていない場合は全体に対して話をするが、基本的に教師は机間巡視をして個別指導を行なう。前述したノートのチェックは重要な仕事で、適切なアドバイスをするためには、学生が借りる対象となっている全ての本に目を通して、粗筋や難易度を理解しておく必要がある。こうしておく、仮に他の学生のノートを写した者がいても、教師がその学生と本の詳しい内容について話し合うと、本当に読んだかどうかを確認出来る。授業中、学生に読書をさせるだけであれば教師は楽であるが、マンネリ化しないように常に読書欲をかきたてる指導をしなければならないので、実際は相当忙しい。一旦学生が英語を読む楽しさを体得できれば、教師から押しつけられた本ではなく自分の好きな本を選んで読めるのだから、マンネリどころかとても興味深い授業になるはずである。

3. 多読授業と精読授業の比較

筆者らは、多読授業と、訳読をさせる精読授業（週一回、90分）をそれぞれ一年間受けた学生の読解力の伸び率の相違を調べた。読解力は、pre-test と post-test に全く同じ cloze test を与えることによって測定した。Cloze test は Madsen に依ると holistic test であり、それゆえ全体的な意味の把握力だけでなく、文法、単語力を同時に測ることができるというが、一方天満は cloze test は読解力というテキスト全体の内容把握力をテストするよりも、下位段階のテスト、つまり、空所の前後の狭い範囲の理解度をテストすることになりがちであり、このテストが文章全体の意味内容の把握を評価しうるか否かは疑わしいという。この様に、cloze test が読解力の評価として妥当かどうかは賛否両論があるが、今回使用したテストは、メイソンが過去7年間にわたって実施してきたもので、このテストで何点を取れば何語レベルの本が読めるという相関関係が経験的にわかっているので、今回も同じテストを使用することにした。このテストは全文が約1,600語からなる英文で、導入部以外の部分を10語毎に10ヶ所を空所にした、全100問、試験時間60分のものである。空所に入れる語は原文と一致しなくても、意味が通り、文法上の誤りがない場合は正解とした。原文の難易度は、ネイティブの小学6年生が読める程度である。この難易度のテキストを選んだ理由は、post-test 実施時、つまり多読コース終了時にこの程度の英文を理解できるようになって欲しいと考えるからである。pre-test と post-test には同じ問題を使用するが、それでは学生は内容を覚えてしまうのではないかと懸念されるかもしれないが、pre-test の段階では大多数の学生が英文の内容を理解しておらず、テスト実施後に解答の発表もしないし、2つのテストは一年の間隔を空けて行なうので、pre-test の答えを覚えるという心配は無用だと思う。また、テストは二回とも抜き打ちで行なった。尚、メイソンはテストの信頼性を調べるために、英語力がほぼ同じ英語科の大学生に二週間の間隔をおいて二回実施したところ、correlation (test-retest reliability) は $r=0.87$ であった。

実験をするにあたって立てた仮説は、多読授業と精読授業を受けた学生の読解力を調べる pre-test と post-test の平均点の差が、統計学上有意で、多読授業を受けた学生の方が優れているだろう、である。メイソンは、女子大学英文科、女子短大英語科、いずれも一年生の2クラスが多読を担当し、他の教師が教えた精読授業2クラスと比較した。池田は大学一年生の経済学部1クラスに多読を、経営学部1クラスに精読の授業を一年間行なって比較した。精読授業はいずれも訳読をさせたが池田の精読クラスとメイソンの control group の精読クラスは異なったテキストを使用した。

表1

(a) 大学多読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	22.6	1.6	4	47
Post	29.2	0.4	8	51
	N=36	t-value=7.5	p<0.0005	

(b) 大学精読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	18.2	7.0	0	30
Post	20.4	6.1	9	32
	N=32	t-value=1.7	0.025<p<0.05	

表2

(c) 大学多読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	29.6	8.9	15	47
Post	48.1	8.9	30	64
	N=40	t-value=16.3	p<0.0005	

(d) 大学精読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	31.3	11.0	3	54
Post	41.9	11.5	24	68
	N=39	t-value=8.6	p<0.0005	

(e) 短大多読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	16.1	8.0	2	35
Post	33.7	9.0	17	49
	N=31	t-value=16.1	p<0.0005	

(f) 短大精読組

	Mean	SD	Min	Max
Pre	17.6	7.4	1	29
Post	25.7	10.1	12	41
	N=18	t-value=4.4	p<0.0005	

表3

(c) 大学多読組と (d) 大学精読組との伸びの差の有意値 (Unpaired t-value=4.99 p<0.0005)

DF	(c) count	(d) count	Gain Mean (c)	Gain Mean (d)
72	40	39	18.85	10.59

表4

(e) 短大多読組と (f) 短大精読組との伸びの差の有意値 (Unpaired t-value=5.04 p<0.0005)

DF	(e) count	(f) count	Gain Mean (e)	Gain Mean (f)
46	31	18	17.06	7.50

表1は池田の、表2はメイソンの実験結果である。表1では多読授業には読解力の伸びが見られたが、精読授業には見られなかった。表2では全てのクラスで読解力の伸びがみられたが、表3、表4に示されるように多読授業の方が、精読授業よりも効果があったと言える。しかし表1の多読組と表2の短大多読組を比較してみると、後者の方が前者より pre-test の平均点が6.5点低いにもかかわらず、post-test では4.5点上回っている。つまり表1の多読組は読解力が伸びたものの、表2の短大多読組に比べるとそれ程成果は上がっていない。そこで次項ではこれらの授業を振り返り、より良い多読授業を実現するために留意すべき点について述べる。

4. 多読授業を成功させるための授業管理について

2-1. の項で述べた様に、学生に多読という授業形態をよく理解させ、その効果についても充分納得させることができるかどうかで授業の成否は大きく左右される。というのは単位取得にしか関心がない学生にとっては自分のペースで進ませる教授法は、逆に言えばいくらでも怠けることができる方法でもあるからだ。課題となっているノート作成は、他の人のノートを写せば自分が読んだような体裁を整えられるし、授業中の読書に到っては読んでいる振りさえしていれば、熱心な学習者として教師の目に写る。これを防ぐには学生が本当に多読をしたいという気持ちを持たせるしかない。さもないと、学生の中から次のような不満が出てくる。①他人のノートを写す学生と、そうでない学生と成績の上で差をつけて欲しい。②2,000ページを読めばよしとするのではなく、難しいレベルの本を読んだ学生と、低いレベルの本ばかり読んでページ数を稼いでいる者との間に差をつけて欲しい。そのためには、あるレベルの本を何ページ読むこと、という様にレベルを決めてはどうか、等である。①については、読んだ本に関して個々の学生に質問をすれば、本当に読んだのかどうか明らかになるが、学生数が多いときには、全員に対してそうすることは難しい。②については、多読授業は原則として何を読むかは学生の自主性に任せるので、何のレベルを何冊と制限すると、レベルに関係なく興味のある本を読みたいという学生の希望を叶えられなくなるし、もしもそう決めたとしても読まない学生は、やはり読まないであろう。いずれにせよ①も②も手抜きをした者は、期末試験でそれなりの結果が現われるし、仮に手抜きをしたにもかかわらず成績が良かったり、逆にすべて真面目にこなしたのに成績不振というケースがあれば、それは高校卒業時点での読解力の差に起因すると思われる。

メイソンが教えたのは全員英語専攻の女子学生であるから、大多数が男子で経済専攻の池田の対象学生と比べると、おのずから学習意欲にも差があると思うが、経済専攻でも女子学生の場合には課題を真面目にする学生が多かった。性差があるのかもしれないが、学習意欲が少ない場合には、1学期に1,000ページ読むことと決めるだけでなく、教師の側で1週間に何ページと具体的に決め、毎週読んだかどうかを確認するぐらいに管理しないと、学生はなかなか自主的に計画を立てて読もうとはせず、結局学期末近くに時間切れとなって、前述の不正手段に訴えることになる。後で述べる学生の感想に見られるように、最初は何の学生も英語を読めないと思っているので、その先入観を打ち破るために、早い時期に毎日少しずつでも、とにかく読ませて自信をつけさせることが肝要である。

学習態度の他に問題となるのは、本の管理である。特定の部屋に本を置き、そこに自由に学生に出入りさせて本を貸し出させるという方法を取ると、返却の遅れ、本の紛失が後を断たず、すぐに本が

不足してしまう。そこで貸し出す曜日、時間、一度に借りられる本の冊数を決め、教師や、教師に代わる人が貸出カードの記入、返却された本を所定の位置に戻す等を確実に行なわないといけない。そういう部屋も人手も用意できない場合には、授業の度毎に、教室に本を運び入れ、授業時間の一部を割いて本の貸出を行なうという方法がある。教室に本を運び入れると言っても一冊一冊の本は薄いのので難しいことではない。この方法では授業時間がもったいないように思われるが、貸し出せる本を十分に確保しなければ、この授業は成立しないので仕方がないであろう。

5. 学生の感想

読める筈がないと思っていた英語の本が読めるようになったばかりか、英語が好きになり、嫌いだった日本語の読書も好きになったという感想を述べる者が多い。また、低いレベルの本はどうか読めるので、そのレベルの本ばかり読んでいた者が、友人に勧められて上のレベルの本を読んでみたところ、時が経つのを忘れる程に楽しむことができたという報告もある。これは不思議なことではない。低いレベルの本は、非常に限られた語数で書かれているのでストーリーがどうしても単純になり、大学生には幼稚に感じられるものが多いからである。そこで、ある程度すらすら読めるようになれば、自信はなくても思い切って次のレベルへ進むと、話の展開が複雑になりおもしろく感じられるのである。否定的な感想としては2,000ページは多過ぎる、粗筋を英語で書くのが面倒である、文法の授業をして欲しい、等がある。既に述べたように四月の学期当初から少しずつ読んでいけば、決して実行不可能な量ではないし、読んだ記録として粗筋を書くのは、読み終えた本を自分がどの程度理解したのかを確認し、meaningful input である読書を meaningful output に変換する作業として重要である。また、文法の授業を望む学生は、文法がわからないと英語の本を一行も読めない、と思い込んでいるのではないだろうか。いずれにせよ多読の楽しみを会得した学生からはこういう不満は出てこない。

6. おわりに

英語を専攻する学生はもちろん、そうでない学生も、大学卒業後日本語の本を読むのと同じ程度の気軽さで、英語を読むことが出来れば、海外の情報をいち早く取り入れられ、人生が豊かになると思う。多読コースを一年間終了した時点で、そのレベルにまで到達出来る人は稀であろうが、多読コース終了後も授業で与えられた方向づけ通り読み続ければ、独力で早晚そのレベルに達する。教師は学生にどのようにすれば自学自習ができるのかを教え、強制されなくても継続して学習したいと学生に思わせることができればその指導は大成功である。

(帝塚山大学、四天王寺国際仏教短期大学部)

《 参考文献 》

Madsen, H. *Techniques in Testing*. New York, NY: Oxford University Press, 1983.

天満 美智子 『英文読解のストラテジー』 大修館書店 1990年